

文学部

【2025年度 大学評価総評】

文学部は2024年度の大学評価委員会の指摘を真摯に受け止め、教育課程・教育方法の実質的改善を通じて学修成果の可視化と検証に向けた取り組みを着実に前進させている。総合型選抜入試の再編成、カリキュラム改編に伴う新科目の導入、さらに文理融合的な教育実践など、多層的に設計された教育改革は、学部としての理念を具体化する実践知の体現と評価できる。加えて、教員FDの組織的实施や学生モニター制度を活用した意見収集とフィードバックループの形成は、教育の質保証に対する構造的アプローチとして特筆に値する。また、学部共通科目「文学部生のキャリア形成」において海外在住の国際機関に勤務する方による講演を実現し、その成果を共有したことは、文学部の新たな試みとして評価できる。

また、日本文学科の『法政文芸』編集活動が「自由を生き抜く実践知大賞」を受賞したことは、学生主体の創造的活動が教育の枠を超えて社会的評価を得た象徴的事例であり、人文学の社会的意義を再確認させるものである。教員組織面では、語学・専門分野の精緻な適合を踏まえた人事戦略が講じられつつあり、教育と研究の質的充実に向けた持続可能な基盤整備が進められている。

一方、教員構成の将来像を見据えつつ、人事委員会および教授会で組織的に専任教員の新規採用を行っているものの、一部の人事で学部と市ヶ谷リベラルアーツとの間で要望に齟齬が生じ、採用に遅れが生じたことは、今後全学的に検討すべき課題であろう。

【2025年度 自己点検・評価結果】

I. 改善・向上の取り組み

(1) 2024年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2024年度大学評価結果総評】(参考)

全体的には、適切に設定された年度目標と達成指標に基づいて適切な対応がなされていると評価される。併せて次年度の年度目標と達成指標についても、中期目標を踏まえた、昨年度とは別観点のポイントが設定されており、自己点検・評価を積極的に進める観点からも高く評価される。

帰国生入試・グローバル体験入試・自己推薦入試・国際バカロレア入試といった総合型選抜入試を再編成することを決定したこと、学部全体としてカリキュラム改革に取り組み学則改正を行ったことなど、大学評価委員会の評価結果をふまえて各学科における改革への積極的な取り組みを続けているところは高く評価できる。

さらに、学生の意見を把握し、教育の質向上に活用するための方策についても、文学部質保証委員会で意見交換を行うなど積極的な対応が認められる。引き続き学科・質保証委員会等を通じての検討・議論を継続していただきたいことと同時に、どのように学習成果を評価し、どのようにフィードバックしてその効果を検証するのか、具体的な方策を策定して実施に移すプロセスの実現へ向けた検討も期待したい。

【2024年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

上記評価結果にて「高い評価」を受けた年度目標・達成指標の各項目は、おおむね達成できた。「教育課程・学習成果」に関しては、カリキュラム改革での変更科目の履修者動向の把握、文理融合科目の紹介、双方向型授業のフィードバック方法の情報共有などにより年度目標を達成し、「学生の受け入れ」に関しては、総合型選抜入試の出願要件等を検討の上、入試要項に集約することができた。学生の意見の把握に関しても、SSI コースの学生を対象にした学生モニターを実施し、状況と課題の把握、改善策の検討を行えたことは大きな成果であった。(2024年度中期目標・年度目標達成状況報告書参照。)

他方、今後への期待として挙げられた「学習成果の評価・検証」については、2024年度がカリキュラム改革の初年度にあたり、2025年度以降に実施される内容もあることから、当面は関連科目の履修状況や学生の取り組み状況の把握に努め、一定の把握ができたところで学習成果や効果の検証を図る方針である。その前段階として、2024年度は、関連する新規開講科目の履修状況を該当学科(日本文学科、英文学科)および学部で把握・共有した。いずれも多く履修者が集まり、順調な滑り出しができたと考えている。中でも、英文学科の「英語圏文学研究」「英語圏文学演習」(大学院との合同科

目)においては、大学院生の発表から学ぶことで学部生の発表の質が向上したり、学部生が卒論計画の相談を大学院生にしたりといった大学院生・学部生の交流効果が生じており、科目設置の成果が始めている。

(2) 改善・向上の取り組み (教育課程およびその内容、教育方法)

<p>アセスメント・ポリシーに基づき、ディプロマ・ポリシーに示した学習成果を把握しましたか。結果を学部としてどのように評価しましたか。</p> <p>＜対応する大学基準：学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。＞</p>	<p>S. 学習成果が達成できていることが確認できた</p> <p>A. 学習成果が概ね達成できていることが確認できた</p> <p>B-1. 学習成果が達成できていないものがあつたことを確認できた</p> <p>B-2. 学習成果の達成度を確認するには、測定方法が不十分であることが確認できた</p> <p>B-3. ディプロマ・ポリシーの見直しの必要性を確認できた</p>	<p>A (学習成果が概ね達成できていることが確認できた)</p>
---	--	-----------------------------------

上記の選択をしたのはなぜですか。実施主体、測定対象や測定方法を踏まえて理由を具体的に記入してください。

《理由》

文学部では、2024年度より各学科にてカリキュラム改革を実施しており、それに関連する科目の新設や改編を順次実行中である。2024年度はその初年度にあたり、学習成果の把握や評価を行う段階には至っていないが、今後、履修実績や成績データの蓄積を待って、成果の把握・評価を行っていく予定である。他方で、その前段階として、今後、学習成果を適切に把握していくための準備的な試みとして、下記2つの取り組みを行った。

①第11回教授会(3月)にて、FD研修会として、双方向型教育における学習成果の把握に向けたフィードバックの方法・実践についての教員向け研修を行った。これにより、演習授業のみならず講義形式の授業においても課題や質問を示したフィードバックシートの配布という方法を通じて、双方向的な学習効果の向上と個々の学生の具体的な学習成果の把握が図れることが示され、教員間で理解の共有がなされた。

*第11回(3月)教授会議事録参照。

②後記2(3)記載のように、11月に文学部各学科のSSI生を対象にした学生モニターを実施する中で、参加者に向けて、文学部のアセスメント・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの内容を解説し、それらとSSIのカリキュラムとの関連を示した。学生に対して、単位修得や評価に関する学部学科としての基準の理解を促しつつ履修指導を行うことが、学習成果の達成とその適切な把握にプラスの効果をもたらすことを期待しており、学習成果把握の前段階としてこれらのポリシーでの「単位修得・評価基準の周知・理解」の取り組みを引き続き行っていきたい。

*2024年度学生モニター制度実施報告書(2025.1.29付)、第9回(1月)教学改革委員会議事録、第9回(1月)教授会議事録参照。

教育課程およびその内容、教育方法について、学部として過去4年間(2021年度~2024年度)の中で特に改善・向上に向けて取り組んだ事例について、①~⑩の項目から《改善した項目》を選択し(レ点チェック)、その詳細について《改善内容》《改善した結果良かった点・課題》を記入してください。

＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞

<p>事例</p>	
<p>《改善した項目》 (複数選択可)</p>	<p><input type="checkbox"/> ①開講時期、開講頻度、授業時間等</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> ②授業科目の内容(目標、内容、開設授業科目数、授業科目の統廃合)</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> ③授業科目の関係(各科目間の関係、ナンバリング、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修系統図等)</p> <p><input type="checkbox"/> ④教育方法(授業の形態、授業方法等)</p> <p><input type="checkbox"/> ⑤評価基準、評価方法</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> ⑥学生の履修(履修科目の登録上限、履修順序、必修科目と選択科目の設定、配当年次等)</p> <p><input type="checkbox"/> ⑦地域社会・国際社会・産業界等の社会との接続、大学院教育との接続</p> <p><input type="checkbox"/> ⑧学習支援(単位の実質化のための取り組み、各種相談・サポート、学生の主体的な学習を促す取り組み)</p>

- ⑨留学、インターンシップ、フィールドワーク等プログラムの充実
- ⑩その他

《改善内容》

※理由を含めて記入してください。

2021年度から2023年度にかけて、各学科にて授業の内容や配置、必要単位数の設定などを見直すカリキュラムの改編を検討し、2024年度からカリキュラム改革を順次実行している。その中で、科目の新設・再編による専門教育の拡充（哲学科：「文献講読」の新設・再編、日本文学科：「日本文芸研究特講（8）言語C・D」「くずし字入門A・B」の新設、英文学科：「世界文学講義」の新設、大学院との合同科目「英語圏文学研究」「英語圏文学演習」の新設、史学科：「東洋史特講」の増設（ILAC主催科目への乗り入れ）、地理学科：「社会経済地理学A～C」の学年配当見直し、「地理学研究法基礎（1）～（2）」の新設、ゼミの8単位必修化とセメスター化、GIS系科目の充実化、地誌学系科目と実験系科目の統廃合など）を行うと共に、単位修得の要件を見直し、学生の履修上の自由度を上げる（注）といった取り組みを行った。

（注）哲学科：ILAC200番台科目におけるリベラルアーツ科目（8単位以上）と外国語科目（4単位以上）の必要単位数の条件を外し、両科目あわせての必要単位数条件を12単位以上から8単位以上とした。あわせて、専門科目中の自由科目の必要単位数を8単位以上から4単位以上とした。地理学科：2年次の語学を選択制にした。

*2024年度・2025年度『文学部履修の手引き』参照。

《改善した結果良かった点・課題》

2024年度からの実施であるため、結果・効果の把握や課題の抽出を行う段階には至っていない。今後、履修実績や成績データの蓄積を待って、成果の把握・評価を行っていく方針である。

（3）改善・向上の取り組み（教員・教員組織）

教員・教員組織について、学部として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを《項目》の中から選択し、《内容》を記入してください。

・教員組織に対する取り組み※

※主に、教員が担う責任の内容、科目適合性の学内での判断、各教員の担当授業科目、担当授業時間の把握・管理（複数の所属、他大学・企業等との兼務教員について業務状況や教育効果含む）について

・教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につながる組織的な取り組みとその成果

・授業における指導補助者（TA等）の活用に対する取り組み

《対応する大学基準：教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげていること。》

《対応する大学基準：教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。》

《対応する大学基準：教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》

《特色または課題》

特色

《項目》

教員組織に対する取り組み※主に、教員が担う責任の内容、科目適合性の学内での判断、各教員の担当授業科目、担当授業時間の把握・管理（複数の所属、他大学・企業等との兼務教員について業務状況や教育効果含む）について

《内容》

・哲学科にて、英語・独語・仏語の原典理解を通じた専門教育を充実させる方針の下で、これら各言語に関する文献講読授業を選択必修科目として設置することとした。それに基づき、仏語の文献講読授業を含め、フランスの現代哲学の授業担当が可能な教員確保の必要性を学科にて協議・確認し、その旨をILAC運営委員会に申し入れた上で、2表教員人事としてそれに該当する教員の公募を2025年度に行うこととした。

*2024年度哲学科4月・5月定例学科会議、8月臨時学科会議、9月・10月定例学科会議、10月臨時学科会議、文学部第6回（10月）教学改革委員会議事録、第6回（10月）教授会議事録、第7回（11月）人事委員会、第7回（11月）教授会議事録、第10回（3月）人事委員会、第10回（3月）教授会議事録、第8回（12月）・9回（1月）ILAC運営委員会議事録。

・英文学科にて、2表教員人事にあたって、教養教育との連携や接続性を踏まえて担当領域の検討を行い、英語圏を中心とする西洋文化圏に関する教育研究を担える教員としてドイツ語、スペイン語に関する科目を担当できる教員を採用する方針を立てた。それに基づく採用科目希望をILAC運営委員会に提出し、後者についての教員の公募を2025年度に行うこととなった。（前者のドイツ語教員に関しては、2025年度になって4月のILAC運営委員会にて科目承認されたため、こちらも2025年度中に教員公募を行う予定である。）

* 文学部第7回(11月)人事委員会、第7回(11月)教授会議事録、ILAC運営委員会第8回(12月)・9回(1月)・10回(2月)・11回(3月)議事録。

II. 全学的な自己点検・評価結果より見出された重点的な評価項目

(1) 自由を生き抜く実践知を体現する取り組み

<p>学部における「実践知」を体現する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p> <p>＜対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>S(さらに改善した又は新たに取り組んだ)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>＜内容＞</p> <p>日本文学科の学会組織である法政大学国文学会発行の文芸誌『法政文芸』が、第8回「自由を生き抜く実践知大賞 自由な学風の継承賞」を受賞した。本誌は、教員編集長(日本文学科専任教員)の下で、学生編集長を中心とする編集委員を学部学生が務め、企画・取材・校正などの編集業務をすべて学生が行う形で刊行している。学生が主体となって自由に企画立案し、刊行までの作業を担って雑誌として完成させ、書店販売・フリマ出店などを通じてその成果を継続的に社会に発信している点が「実践知」の活動として評価され、受賞の榮譽を得ることができた。</p> <p>* 第8回(12月)教授会議事録、法政大学文学部同窓会報第47号3頁参照。</p> <p>他方、教員間の研究・教育に関して、第11回(3月)教授会にて、FD研修会として、文学部での文理融合教育・研究に関する教員研修を行った。脳科学領域での検討を通じて、科学的・実証的な研究を踏まえた価値創造の探究が文学部での文理融合の取り組みの例となることが紹介され、教員間で理解の共有がなされた。科学や医学と人間的・社会的価値の検討を架橋する意味で「実践知」を体現する取り組みとして位置づけられる。</p> <p>* 第11回(3月)教授会議事録参照。</p>		

(2) オンライン教育の取り組み

<p>オンライン授業は「2024年度以降の授業編成における留意点について(報告)」(2023年度第6回学部長会議資料No.7)に沿って、適した授業科目に用いられ、その有効性や教育効果を確認し、改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A(概ね従来通りである又は特に問題ない)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>＜内容＞</p>		

(3) 学生の声を活かした取り組み

<p>学部レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>S(さらに改善した又は新たに取り組んだ)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>＜内容＞</p> <p>11月に文学部各学科のSSI生を対象にした学生モニターを実施し、SSI生の就学上の課題等について学生から意見聴取を行うと共に、課題解決のための対応を検討した。履修等に関する情報周知の必要性や授業配置の工夫などが課題として示されたため、教学改革委員会・教授会にてその結果を報告</p>		

<p>し、教員間で理解を共有した。また、SSI 運営委員会との間でもその結果を共有すると共に、4月のオリエンテーションなどにその対応を反映させる。 *2024 年度学生モニター制度実施報告書 (2025. 1. 29 付)、第 9 回 (1 月) 教学改革委員会議事録、第 9 回 (1 月) 教授会議事録参照。</p>		
<p>授業レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A (概ね従来通りである又は特に問題ない)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p>		

III. 2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
中期目標	学位授与方針に基づき、各学科の専門分野の学問内容を積み上げてゆく専門科目と幅広い知識や教養を身につける教養科目とを融合・連携させた、現行の教育課程・教育内容をさらに発展させる。また、全学共通の新規科目の取り込み方を含め、設置科目の見直しを引き続き行う。	
年度目標	カリキュラム改革に伴って変更のあった科目の履修者動向の検証を開始する。カリキュラム改編に向けた科目の整理統合について検討する（心理学科）。	
達成指標	カリキュラム改革に伴って変更のあった科目について、各学科で履修者動向を調査し、教学改革委員会にて、その結果を報告する。 教学改革委員会等でカリキュラム改編の改定案を報告する（心理学科）。	
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	いずれも、第 7 回教学改革委員会において報告され、意見交換がなされた。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	カリキュラム改革を踏まえた履修者動向の調査と、心理学科のカリキュラム改定案について、学科および学部で議論が重ねられた。年度目標は達成できたと言える。
改善のための提言	履修者動向については 1 年の調査だけでは見えてこないこともあるので、継続して調査をしていく必要があるのではないかと。	
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
中期目標	教育課程の編成・実施方針に掲げた課題の発見・解決やそれを表現する能力の涵養に資する教育方法を、各年次における演習科目等で継続するとともに、他の科目でも適用範囲をさらに広げてゆく。	
年度目標	文学部において実現可能な文理融合科目について検討する。	
達成指標	文学部での文理融合科目の実例を教授会で紹介する。	
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	第 11 回教授会において、学部の特性にあわせた文理融合科目の実例が紹介された。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	文学部において実現可能な文理融合科目について、実例の紹介を通じて具体的な検討がなされた。年度目標は達成できたと言える。

	改善のための提言	今後は実例の紹介にとどまらず、文学部において実現すべき文理融合科目について、さらに議論を深める必要があるのではないか。
	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
	中期目標	演習以外の科目においても、双方向型の運営部分をさらに充実することにより、学生の学習成果についてより精緻に把握する。学期中の各段階における学習成果の測定をより細かく行い、それを学生へ適切に伝えられるようにする。
	年度目標	授業期間内に学習成果の把握とフィードバックを実践している双方向型授業をとりあげ、そのあり方を検討する。
	達成指標	演習以外の科目で、双方向型の授業の実例を教授会で紹介する。
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	第11回教授会において、大規模講義科目におけるフィードバックの工夫を通じた双方向型授業運営の実例が紹介された。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	演習以外の科目における双方向型授業運営のあり方について、実例の紹介を通じて具体的な検討がなされた。年度目標は達成できたと言える。
改善のための提言	今後は双方向型授業運営にはどのようなヴァリエーションがありうるかについて、さらに議論を深める必要があるのではないか。	
	評価基準	学生の受け入れ
	中期目標	学生の受け入れ方針として設定した能力・意欲等を入学した学生が有していたと言えるか否か、各種の入学試験経路別に分析を続けることにより、それぞれの試験のあり方を再検討してゆく。
	年度目標	再編成した総合型選抜入試の実施に向けた準備を行う。
	達成指標	再編成した総合型選抜入試の実施に向けて、求める学生像を明文化し、入試要項を作成する。
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	学務部学部事務課文学部担当および入学センターと協働で、出願要件等を各学科および入試小委員会において吟味し、2026年度の入試要項を作成した。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	総合型選抜入試の実施に向けて、入試要項が作成された。年度目標は達成できたと言える。
改善のための提言	今後は再編成された総合型選抜入試が実際に求める学生の入学につながったかどうか、検証していく必要があるのではないか。	
	評価基準	教員・教員組織
	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
	年度目標	年齢、国際性等の観点から教員組織の現状を検証し、さらに多様性をもった教員構成を目指す。
	達成指標	人事委員会および教授会において、過年度の教員採用状況を共有し、教員構成の将来像を見据えつつ、専任教員の新規採用に関する審議を行う。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B

年度末報告	理由	第1回・第4回・第5回・第6回・第7回・第8回人事委員会および教授会において、日本文学科、地理学科、心理学科の専任教員採用について慎重かつ十分な議論を行い、教員構成の改善に繋がる専任教員の採用を実現した。 一方、英文学科における2表教員の採用についてはILAC諸語分科会との間に要望上の齟齬が生じていることから、学部・学科教育と教養教育を両立することのできる教員の採用に至っていないことには課題を残している。ただし、哲学科の2表教員の採用においてはそのような齟齬が生じることなく人事を進めつつある。
	改善策	ILAC運営委員会のもとで進められるプロジェクトにおいて、英文学科で採用する教員の実績等について検討・調整する予定である。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	日本文学科、地理学科、心理学科において教員構成の改善に繋がる専任教員の採用が実現した。また哲学科の2表教員人事も進みつつある。しかし英文学科の2表教員人事は、学部・学科・ILAC運営委員会において十分に議論を重ねつつも、思うように進展していない。
	改善のための提言	改善策にある通り、今後は2表教員人事を市ヶ谷キャンパス全体の問題として捉え、ILACと学部の間で要望の齟齬が起こらないように調整していく必要がある。
評価基準	学生支援	
中期目標	①成績不振学生への個別指導を丁寧に行う。また、外国人留学生、体育会学生等への特性に応じた支援も行う。	
年度目標	2024年度よりカリキュラム改定を行ったSSIコースの学生に対する修学支援のあり方を検討する。	
達成指標	①SSIコースの学生を対象に学生モニターを実施し、修学上の課題を明らかにする。 ②SSI運営委員を中心に、必要に応じて関連部局と連携しながら、上記課題の改善策を検討し、教授会で共有する。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	2024年11月11日に学生モニターを実施し、SSI運営委員会ならびに保健体育センターと連携しながら、課題の改善策を検討し、第9回教学改革委員会および第9回教授会で共有した。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
所見	SSIコースの学生を対象に学生モニターを実施し、そこで明らかになった課題の改善策を関連部局と検討し、学部で共有した。年度目標は十分に達成できたと言える。	
改善のための提言	—	
評価基準	学生支援	
中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。	
年度目標	現代社会の動向を考慮しながら、キャリア支援に繋がる学部共通科目の内容をさらに充実させる。	
達成指標	学部共通科目「文学部生のキャリア形成」において国際経験豊かな方による講演を実現し、共通科目運営委員会においてその効果について検討する。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	海外在住で、国際機関に勤務する方による講演を実現し、その成果を共通科目運営委員会で検討し、共有することができた。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	

	所見	「文学部生のキャリア形成」において、国際機関に勤務する方による講演を実現し、学生のキャリア支援を充実させることができた。年度目標は十分に達成できたと言える。
	改善のための提言	—
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		学部の教育・研究を社会へ広報することで学部の社会における認知度を高めつつ、社会人の学び直し等の機会提供に努める。
年度目標		学部専任教員による社会貢献活動を継続的に実施し、学部の社会における認知度を高める。
達成指標		学部専任教員による、社会貢献につながる諸活動・諸成果を文学部ホームページに掲載する。
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	文学部ホームページ内に「文学部の学生・卒業生・教員の活躍」というページを開設し、広報小・IT 委員会の運営により、学部専任教員のみならず文学部生も対象として、その諸活動・諸成果を掲載している。
	改善策	今後、ホームページで紹介する活動の種類をさらに広げるなどして、充実化・多様化を図りたい。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	文学部ホームページにおいて、学生・卒業生・教員の活動や成果を紹介していく体制が整った。年度目標は十分に達成できたと言える。
	改善のための提言	今後は当該ページの閲覧数を増やしていくための方策が必要となるのではないかと。たとえばオープンキャンパスのページや入試情報サイトに当該ページを掲載することなどが考えられる。
<p>【重点目標】 2024 年度よりカリキュラム改定を行った SSI コースの学生に対する修学支援のあり方を検討する。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 ①SSI コースの学生を対象に学生モニターを実施し、修学上の課題を明らかにする。 ②SSI 運営委員を中心に、必要に応じて関連部局と連携しながら、上記課題の改善策を検討し、教授会で共有する。</p>		
<p>【年度目標達成状況総括】 2024 年度の文学部ではカリキュラム改革を進めるとともに、履修者の動向からの分析を開始した。あわせて文理融合科目や双方向型授業の実例を紹介するなど、近年の教学改革にふさわしい取り組みを学部内で共有することができた。また、学生モニターを通じて SSI 学生の修学上の課題について把握し、その改善について学内への働きかけを始めている。入試改革にも積極的に取り組み、総合型選抜の入試要項を改訂している。</p> <p>教員採用については英文学科の 2 表教員人事に課題を残しているものの、日本文学科、地理学科、心理学科において組織のあり方にふさわしい形で実現することができ、哲学科においても採用人事を進めているところである。さらに、教員の社会貢献活動を広く発信するためにホームページを活用する取り組みを始めたところである。以上のように、文学部においては 2024 年度の目標を概ね達成することができたと認識している。</p>		

IV. 2025 年度中期目標・年度目標

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
中期目標	学位授与方針に基づき、各学科の専門分野の学問内容を積み上げてゆく専門科目と幅広い知識や教養を身につける教養科目とを融合・連携させた、現行の教育課程・教育内容をさらに発展させる。また、全学共通の新規科目の取り込み方を含め、設置科目の見直しを引き続き行う。

年度目標	カリキュラム改革にて変更した科目について、昨年度との比較を含めて、今年度（2年目）の履修者動向を把握・検証する。心理学科では、カリキュラム改編に向けた科目の整理統合について検討する。
達成指標	該当科目について、各学科にて、昨年度・今年度の履修者動向を調査し、教学改革委員会にて、その結果を報告する。特に「科学哲学1、2」（哲学科）では（ILAC科目に学部科目が乗り入れるケースはこれまでもあったが）ILACから学部科目への乗り入れという新しい試みがなされるので、履修者動向等を含めてその影響を把握する。心理学科では、教学改革委員会等で、カリキュラム改編の改定案を報告する。
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標	教育課程の編成・実施方針に掲げた課題の発見・解決やそれを表現する能力の涵養に資する教育方法を、各年次における演習科目等で継続するとともに、他の科目でも適用範囲をさらに広げてゆく。
年度目標	新学習支援システムの下で、卒業論文の電子提出に関する適切な方法を検討する。
達成指標	旧システムでのやり方と課題を踏まえて、新学習支援システムに基づく卒業論文電子提出の方法を検討し、運用する。
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	演習以外の科目においても、双方向型の運営部分をさらに充実することにより、学生の学習成果についてより精緻に把握する。学期中の各段階における学習成果の測定をより細かく行い、それを学生へ適切に伝えられるようにする。
年度目標	昨年度の双方向型授業に関する検討結果を踏まえ、講義型授業における双方向型授業運営・成果把握の有効な活用方法を検討する。
達成指標	該当する取り組み例（リアクションペーパー・学習支援システムなど）を教授会などを通じて学部教員間で情報共有する。
評価基準	学生の受け入れ
中期目標	学生の受け入れ方針として設定した能力・意欲等を入学した学生が有していたと言えるか否か、各種の入学試験経路別に分析を続けることにより、それぞれの試験のあり方を再検討してゆく。
年度目標	今年度から再編実施される総合型選抜入試について、効果の検証を開始する。
達成指標	総合型選抜入試の志願状況・試験結果・入学状況を、昨年度までと対照しつつ、学部学科で把握・検証する。
評価基準	教員・教員組織
中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
年度目標	カリキュラム改革の実践を見据えて、学科の教育目標・カリキュラムに適合した新規教員の採用を行う。
達成指標	今年度に新規教員募集を予定している哲学科、日本文学科、英文学科、地理学科の人事において、適任者の選考・採用を行う。あわせて、昨年度来の課題となっている英文学科の2表教員人事において、ILACでの協議・検討状況を踏まえて、学部・学科の専門教育と教養教育を両立できる適任者の選考・採用を行う。
評価基準	学生支援
中期目標	①成績不振学生への個別指導を丁寧に行う。また、外国人留学生、体育会学生等への特性に応じた支援も行う。
年度目標	外国人留学生の修学支援のあり方を検討する。
達成指標	学生モニター制度などを活用し、外国人留学生の修学状況について、特徴と支援上の課題を把握する。
評価基準	学生支援
中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。

年度目標	各学科でのキャリア支援に関する現状や対応、課題等を把握し、学部全体で情報共有を行う。
達成指標	各学科にてキャリア支援に向けて実践している施策やそこでの課題などを集約し、教学改革委員会等で報告・検証を行う。
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	学部の教育・研究を社会へ広報することで学部の社会における認知度を高めつつ、社会人の学び直し等の機会提供に努める。
年度目標	学部 HP の充実・閲覧数増加に向けて、見やすさや掲載情報等に関する内容整理を検討する。
達成指標	昨年度に開設した「文学部の学生・卒業生・教員の活躍」ページについて、広報小・IT委員会を中心にコンテンツ拡充に向けた対応を検討・実行する。
<p>【重点目標】 昨年度の双方向型授業に関する検討結果を踏まえ、講義型授業における双方向型授業運営・成果把握の有効な活用方法を検討する。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 昨年度の研修会で挙げられたフィードバックシートの活用事例を踏まえ、講義型授業における双方向型授業運営・成果把握の取り組み例（リアクションペーパー・学習支援システムの活用など）を教授会などを通じて学部教員間で情報共有する。</p>	

IV-2. 2025年度中期目標・年度目標達成状況報告書

文学部

評価基準	中期目標 (2022-2025年度)	年度目標	達成指標	年度末報告				
				教授会執行部による点検・評価（教授会承認）		質保証委員会による点検・評価（教授会報告）		
				自己評価	理由	改善策	所見（達成状況の評価とその理由）	改善のための提言
教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関する事】	学位授与方針に基づき、各学科の専門分野の学問内容を積み上げてゆく専門科目と幅広い知識や教養を身につける教養科目とを融合・連携させた、現行の教育課程・教育内容をさらに発展させる。また、全学共通の新規科目の取り込み方を含め、設置科目の見直しを引き続き行う。	カリキュラム改革にて変更した科目について、昨年度との比較を含めて、今年度（2年目）の履修者動向を把握・検証する。心理学科では、カリキュラム改編に向けた科目の整理統合について検討する。	該当科目について、各学科にて、昨年度・今年度の履修者動向を調査し、教学改革委員会にて、その結果を報告する。特に「科学哲学1、2」（哲学科）では（ILAC科目に学部科目が乗り入れるケースはこれまでもあったが）ILACから学部科目への乗り入れという新しい試みがなされるので、履修者動向等を含めてその影響を把握する。心理学科では、教学改革委員会等で、カリキュラム改編の改定案を報告する。	S	第5回（9月）教授会において、該当科目の履修者増減や学習状況に関する報告と意見交換を行い、それぞれの科目の現状把握と課題の抽出が詳しくなされた。	—	履修者動向の調査および科目配置の影響について教授会等で報告・検討が行われている。心理学科のカリキュラム改編も進められている。年度目標は十分達成されたと言える。	—
教育課程・学習成果【教育方法に関する事】	教育課程の編成・実施方針に掲げた課題の発見・解決やそれを表現する能力の涵養に資する教育方法を、各年次における演習科目等で継続するとともに、他の科目でも適用範囲をさらに広げてゆく。	新学習支援システムの下で、卒業論文の電子提出に関する適切な方法を検討する。	旧システムでのやり方と課題を踏まえて、新学習支援システムに基づく卒業論文電子提出の方法を検討し、運用する。	S	文学部事務にて新学習支援システムによる新たな提出方法を編み出し、第4回（7月）教学改革委員会から第6回（10月）教学改革委員会・教授会にかけて中身を検討し改善を図った。11月に同システムによるテスト提出期間を設け、不具合がないことを確認して、12月から1月にかけての本提出で運用し、トラブルなく実行することができた。	—	新学習支援システムを用いた卒業論文電子提出について、検討と試行を重ねた上で、実施に至っている。年度目標は十分達成されたと言える。	—
教育課程・学習成果【学習成果に関する事】	演習以外の科目においても、双方向型の運営部分をさらに充実することにより、学生の学習成果についてより精緻に把握する。学期中の各段階における学習成果の測定をより細かく行い、それを学生へ適切に伝えられるようにする。	昨年度の双方向型授業に関する検討結果を踏まえ、講義型授業における双方向型授業運営・成果把握の有効な活用方法を検討する。	該当する取り組み例（リアクションペーパー・学習支援システムなど）を教授会などを通じて学部教員間で情報共有する。	S	第6回（10月）教授会において双方向型授業運営の工夫に関する研修会を行った。各学科での取り組み事例を報告し、情報共有すると共に意見交換を行った。	—	講義型授業における双方向型授業運営について情報共有が行われており、学習成果の把握方法の改善に向けた取り組みが適切に進められている。年度目標は十分達成されたと言える。	—
学生の受け入れ	学生の受け入れ方針として設定した能力・意欲等を入学した学生が有していたと言えるか否か、各種の入学試験経路別に分析を続けることにより、それぞれの試験のあり方を再検討してゆく。	今年度から再編実施される総合型選抜入試について、効果の検証を開始する。	総合型選抜入試の志願状況・試験結果・入学状況を、昨年度までと対照しつつ、学部学科で把握・検証する。	S	第8回（12月）教授会にて試験結果を報告し学部全体で状況把握を行った。また、第9回（1月）教授会において、総合型選抜入試の志願状況や合格者・手続者状況を、昨年度との比較を含めて把握・検証した。	今年度から自己推薦入試を導入した哲学科・英文学科については、来年度以降も志願状況等を注視し、適切な実施体制を適宜検討する。	総合型選抜入試について志願状況および入学状況の検証が行われ、制度変更の影響を把握する取り組みが実施されている。年度目標は十分達成されたと言える。	—
教員・教員組織	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。	カリキュラム改革の実践を見据えて、学科の教育目標・カリキュラムに適合した新規教員の採用を行う。	今年度で新規教員募集を予定している哲学科、日本文学科、英文学科、地理学科の人事において、適任者の選考・採用を行う。あわせて、昨年度来の課題となっている英文学科の2表教員人事において、ILACでの協議・検討状況を踏まえて、学部・学科の専門教育と教養教育を両立できる適任者の選考・採用を行う。	A	哲学科、日本文学科、英文学科、地理学科いずれの人事においても、適切な時期に人事選考を行い、適任者の採用に至った。英文学科の2表教員人事においても、ILACの関連分科会・部会と共同で選考委員会を組織し、適任者の採用に至った。	—	新規教員採用において適任者の選考が行われ、教員組織の整備は計画どおり進められている。関係組織との調整を要する人事についても対応が図られている。年度目標は達成されたと言える。	今後も、関係組織との連携を図りながら、大局的な視点で人事を検討することが期待される。
学生支援	①成績不振学生への個別指導を丁寧に行う。また、外国人留学生、体育会学生等への特性に応じた支援も行う。	外国人留学生の修学支援のあり方を検討する。	学生モニター制度などを活用し、外国人留学生の修学状況について、特徴と支援上の課題を把握する。	S	外国人留学生を対象とした学生モニターを11月12日に実施し、ヒアリングによる学習状況・課題・要望等の把握を行って第9回（1月）教学改革委員会・教授会で報告した。また、成績不振学生に対しては例年通り各学科にて個別の面談を行い、第5回（9月）教学改革委員会で学部全体での報告を行った。	—	外国人留学生に関する学生モニターの実施や成績不振学生に対する個別指導の報告などを通じて、修学状況の把握と支援の検討が適切に行われている。年度目標は十分達成されたと言える。	—
学生支援	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。	各学科でのキャリア支援に関する現状や対応、課題等を把握し、学部全体で情報共有を行う。	各学科にてキャリア支援に向けて実践している施策やそこでの課題などを集約し、教学改革委員会等で報告・検証を行う。	A	第4回（7月）教学改革委員会・教授会から第5回（9月）教学改革委員会・教授会にかけて、学部でのキャリア支援のあり方を抜本的に見直す議論を行った。各学科でのキャリア支援の対応状況を集約・報告した上で、「文学部生のキャリア形成」等における授業科目としての対応は昨今の就職事情の中で役割を終えたものとして廃止し、今後は学科ごとの対応を中心とすることとした。	—	キャリア支援について、学部内での情報共有と見直しが進められている。年度目標は達成されたと言える。	各学科教員の負担を考慮しながら、学科の事情に合わせた対応を行うことが期待される。

評価基準	中期目標 (2022-2025年度)	年度目標	達成指標	年度末報告				
				教授会執行部による点検・評価（教授会承認）			質保証委員会による点検・評価（教授会報告）	
				自己評価	理由	改善策	所見（達成状況の評価とその理由）	改善のための提言
社会貢献・社会連携	学部の教育・研究を社会へ広報することで大学の社会における認知度を高めつつ、社会人の学び直し等の機会提供に努める。	学部HPの充実・閲覧数増加に向けて、見やすさや掲載情報等に関する内容整理を検討する。	昨年度に開設した「文学部の学生・卒業生・教員の活躍」ページについて、広報小・IT委員会を中心にコンテンツ拡充に向けた対応を検討・実行する。	S	文学部生の活躍情報を募集するGoogleフォームを作成し、学生に周知した。2件の応募があり、自己申告分とあわせて3件の学生活躍情報を掲載できた。他に教員の活躍情報も3件掲載した。	—	学部ホームページの内容充実に向けた検討と情報掲載が行われ、学生・教員の活動発信の強化が図られている。年度目標は十分達成されたと言える。	—

自己評価について

- S 目標を十分達成し、質の向上が顕著である。
- A 目標をほぼ達成し、質の向上が見られる。
- B 目標の達成が不十分である。
- C 目標が達成できていない。

【重点目標】	【目標を達成するための施策等】
昨年度の双方向型授業に関する検討結果を踏まえ、講義型授業における双方向型授業運営・成果把握の有効な活用方法を検討する。	昨年度の研修会で挙げられたフィードバックシートの活用事例を踏まえ、講義型授業における双方向型授業運営・成果把握の取り組み例（リアクションペーパー・学習支援システムの活用など）を教授会などを通じて学部教員間で情報共有する。
【年度目標達成状況総括】	
上記の通り、すべての項目において年度目標・達成指標にかなう対応を実践できた。特に、重点目標とした双方向型授業運営の工夫については各学科での個別事例の紹介等を通じて今後の参考になる情報が共有できた。加えて、講義型授業の場合とは別に、11月の第7回教学改革委員会においてゼミ・卒論に関する各学科の指導体制の現状と課題についての情報共有と意見交換を行い、従来は学科の中で議論・検討されてきたことについて学科をまたいだ議論ができて、この点でも今後の参考になる成果を得ることができた。	